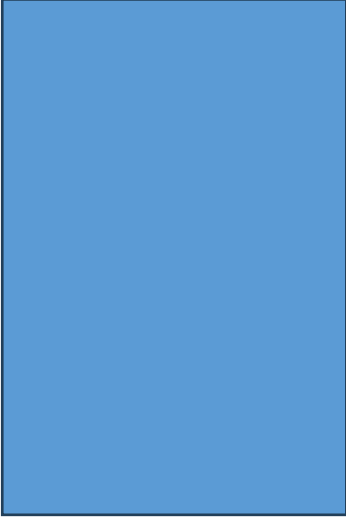


「こんなものを読んできた」(13)

「街の灯」北村 薫

校長 鈴木 健

春らしいシーンから始まる作品ということで、この作品は前の学校でもこの時期に紹介したことがあります。北村 薫の「街の灯」です。



昭和 7（1932）年の春、主人公の花村英子は、女子学習院の同級生、有川八重子から 1 か月遅れのひな祭りに招待されます。八重子の家は伯爵家で、ひな祭りも子供の遊びではありません。桜の咲き誇る大庭園を雪洞（ぼんぼり）でライトアップした、何百人もの招待客のいる大園遊会です。この幻想的なまでに豪華なシーンから、物語は始まります。

第二次世界大戦前（戦前）の日本には今は無くなった華族（貴族）制度があり、信じられない金持ちと貧しい庶民のいる貧富の差の激しい社会でした。その戦前の社会の中で、明るく快活なお嬢様の英子と英子専属の運転手兼護衛の別宮みつ子（ベッキーさん）が、様々な事件を解決していくというのが、「街の灯」から始まる「ベッキーさんと私」三部作の 枠組みです。

このシリーズの魅力はいくつもありますが、まずは主人公の女性二人でしょう。英子は大手物産会社の社長令嬢で女子学習院に通っています。運転手付きの自家用車で送り迎えされるようなお嬢様ですが、とても思いやりと正義感のあるまっすぐな少女です。ベッキーさんは剣道や格闘技、拳銃射撃の達人であるうえに、学者も顔負けの教養を誇るスーパーウーマンです。いつも英子を助けてくれる頼りになる女性ですが、何か過去に謎があるようです。

また精密な時代描写も魅力です。戦前の昭和というと「軍国主義」、「戦争前夜」の暗いイメージで語られることが多いのですが、このシリーズの始まりの昭和 7 年は、まだ大正デモクラシーの自由な雰囲気が残り、満州事変（1931 年）の戦争景気で経済も好調でした。東京の銀座などにはおしゃれな服装で食事や買い物を楽しむ人がたくさんいました。作者の北村薫は史料を詳細に調べて、この時代を見事に再現しています。

ただし、この作品中でも触れられているように、昭和 7 年 5 月には 5・15 事件が起き、犬養毅首相が軍人の襲撃により殺されるなど、時代は戦争に向けて動き始めています。このシリーズは 3 冊ありますが、作品の中で昭和 11 年まで時代が進み、英子たちが関わる様々な事件も次第に暗さを帯びていきます。主人公の英子も好奇心に富んだ元気な 14 歳の女の子から、ちょっと大人の 17 歳の女性へと成長します。

作者の北村薫は、直木賞作家で日本を代表するミステリ作家ですが、昔、埼玉県立の某高校の国語の先生でした。私ごときが生意気ですが、すごく小説が上手な方だと思います。たとえば、この小説には主人公の英子の容姿に関する描写がほとんど出てきません。背が高いのか低いのか、目はぱっちりしているのか切れ長かなどについて、一切書かれていません。それにもかかわらず、読んでいくうちに、読者の頭の中にそれぞれが思い描く快活で魅力的な少女の姿が浮かび上がってくるようになっていきます。見事です。

戸田翔陽の図書館にも入っているので、よかったら読んでください。